



# 「世界のあしたが見えるまち」から 民主主義へのささやかな貢献を

■ 五十嵐 立青



およそ20年前、イギリスの大学院で電子政府について研究をしていた。リサーチアシスタントとして所属していたのはGovernment on the Web (<http://www.governmentontheweb.org/>)という研究チームで、世界各国の行政情報がどのように電子化されサービスとして提供されているかの検証を行っていた。電子政府e-Governmentというややレトロな響きが示すように、研究の中心はあくまでも行政体にあったが、同時にそこでは電子民主主義e-Democracyについてもさまざまな議論が行われていた。新しいテクノロジーにより情報へのアクセスの形が変わり情報量の不均衡が是正されるのか？ 完全な情報を持つことによって一人ひとりがものごとを主体的に判断し意思表示できるようになるのか？ 携帯電話から投票が可能になると既存の政治の仕組みは変わるのか？ といった未来への期待がある一方で、情報を持っても合理的な選択をできるわけではない、すべての情報を吟味できるわけではないので政党のように情報を集約する存在は今後も必要とされる、という視点が主流であった。その中でも大きなテーマだったのは技術とそれを運用する人間の信頼性であった。我々はコントロールされた情報しか見えないのではないか、電子投票した自分の票が自分が選んだ候補者にカウントされていることをどう担保するのか、情報が改ざんされてしまうのではないか、他人のなりすまし投票をどうやって防ぐのか、といった懸念に対して当時は解決策を見出すことはなく、その実現は未来のいつの日かくるのだらうと思いつつもSF映画よりも少しだけリアリティがある程

■ 五十嵐 立青  
つくば市長

1978 年生まれ。筑波大学国際総合学類、ロンドン大学 UCL 公共政策研究所修士課程、筑波大学大学院人文社会科学研究科修了、博士（国際政治経済学）。つくば市議を経て、2016 年よりつくば市長。



度のものであった。

その未来は想像したよりも早くやってきた。

2018年、つくば市は日本で初めてブロックチェーンとマイナンバーカードを組み合わせたインターネット投票を行った。それは政治家を選ぶ選挙ではなく、つくば市が行う社会実装プロジェクトの選考過程で市民投票の形で行われた。ブロックチェーンによるクローズドなシステムを構築し、ノード間で相互監視をすることで、自分の票が確かに意中の行き先に届くことを担保した。同時に、マイナンバーカード内の情報とパスワードを組み合わせる認証によって、なりすましを防ぎ本人が投票していることを確認することが可能になった。さらに翌年には、マイナンバーカード内に保存されている顔画像に端末のカメラによる顔認証を合致させることで、よりセキュアかつシンプルな投票を可能にした。今後マイナンバーの機能がスマートフォンに実装されれば利便性は高まるだろう。まだ課題はあるが、この取組みが技術的には選挙においてもインターネット投票が可能であることを示したことは意義があると考えている。本格的な実施には法改正も含めて整備が必要になるが、それらが実現し、一人ひとりがリアルタイムに意思表示をできる日が来た際には民主主義のあり方もまた変わっていくかもしれない。「世界のあしたが見えるまち」をビジョンとして掲げるつくばから、そんな人類の未来にささやかでも貢献したい。